# 短期大学への評価は卒業後の経験でどのように変化するのか

―2020 年卒業生調査と 2022 年卒業生調査を比較して―

2023年6月4日(日) 桜美林大学 〇宮里翔大・〇堺 完・山崎 慎一 一般財団法人大学・短期大学基準協会 黄海玉

#### 目次

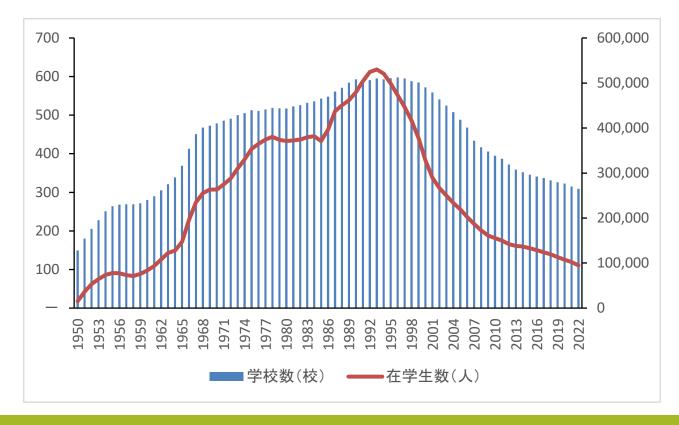
- はじめに一本研究の背景・現状について一
- 研究方法
- 研究結果
- 考察

※スライドが必要な場合、右のQRコードより、 ダウンロード可能ですので、ご活用ください。



### はじめに 一本研究の背景・現状について一

・高等教育機関を取り巻く環境は大きく変化している。⇒特に短期大学については、学校数・学生数ともに大幅に減少。



## はじめに 一本研究の背景・現状について一

- 短期大学教育の特徴(中央教育審議会, 2014)
  - ①学位が取得できる短期高等教育機関
  - ②教養教育と専門教育のバランスの取れた高等教育機関
  - ③職業能力を育成する高等教育機関
  - ④小規模できめ細かい教育を行う高等教育機関
  - ⑤アクセスしやすい身近な高等教育機関
  - ⑥教育の質が保証された高等教育機関
- このことは、短期大学が地域に根差した高等教育機関として、
  - 〇教育機関として高等教育機会の均等
  - ○地域が求める人材の養成
  - 〇女子教育の拡大
  - といった役割は今なお果たし続けていることを示している。

## はじめに 一本研究の背景・現状について一

- 学校教育法上の短期大学の目的 「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は実際生活に必要な能力を育成すること」(学校教育法第108条)
- 短期大学教育に対する評価(中央教育審議会,2014)「また、短期大学は『職業又は実際生活に必要な能力』の育成を目的とし、『地域の様々な企業や事業所などで実務に従事する人材を養成』してきた。

これらのことから、短期大学は「職業や社会に密接なかかわりをもつ」高等教育機関である。

## はじめに 一本研究の背景・現状について一

- 本研究では、 「短期大学で学んだ卒業生が、社会経験を経ることによって短期大学教育 に対する評価がどのように変化するのか」について検討する。
- そのために、大学・短期大学基準協会が実施する「短期大学卒業生調査(短期大学での学びと卒業後の状況に関するアンケート)」を用いる。

#### 方法一短期大学卒業生調査について一

#### 【調査目的】

短期大学で教育を受けた卒業生に対して、短期大学の満足度や 学習成果、短期大学への要望などを尋ね、教育成果の可視化に 関する情報を得る。

#### 【調査対象】

- ・大学・短期大学基準協会会員校全体に参加募集をかけ、調査 を希望した短期大学(会員校 2020年度:268校,2022年度:255校)
- ・参加校の卒業生で、①調査実施時点で、卒業後1年目、卒業後3年目、卒業後5年目、②卒業時点で就職先や進路先が決まっていた者。

#### 【調査方法】

web調査。各校の卒業生に調査依頼文書を送付、文書に記載の QRコードを読み取って調査専用のウェブページにアクセスして 回答。

#### 【実施時期】

7月末~9月上旬の約1か月間。

参加状況		2020	2022
参加短其	月大学数	45	42
調査依頼数		9560	9553
有効回答数		1948	1767
回答率		20.3%	18.5%
(内訳) 卒後 年数	卒後1年目	1169	1154
	卒後3年目	462	367
	卒後5年目	290	217
	その他等	27	29

### 方法一短期大学生調査の設問内容一

Q.	短大/回答者ID	Q.	現在のキャリア
Q.	性別	Q.	現在の就職先
Q.	最終学歴	Q.	現在の雇用形態
Q.	短大に対する総合評価	Q.	在学時に取得した免許資格の活用
Q.	短大教育の学修成果	Q.	卒業後の短大との関わり
Q.	短大推奨度	Q.	短大への卒業後の支援・要望
Q.	卒業直後のキャリア	Q.	<u>短大で学んでよかったこと*</u>
Q.	卒業直業の就職先	Q.	<u>短期大学でもっと学びたかったこと/改善してほしいこと*</u>
Q.	卒業直業の雇用形態	Q.	短大の後輩へのアドバイス*
Q.	卒業直業の勤続年数		*自由記述

※調査集計結果については大学・短期大学基準協会ホームページ>「組織概要」>「刊行物書籍・資料・報告書等」に掲載しているのでそちらを参照のこと(https://www.jaca.or.jp/service/other/research/sotsugyouseichosa/report/)。

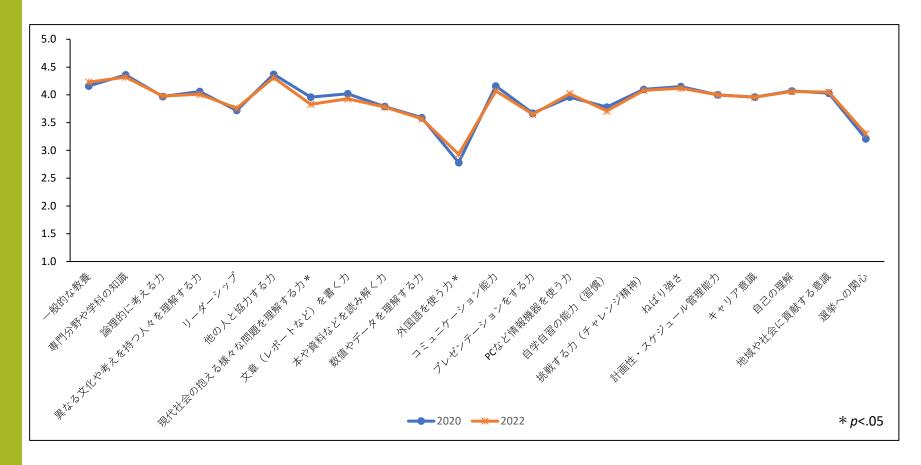
#### 方法一分析の対象一

分析対象とするのは、
2019年度および2017年度短期大学卒業生である。
それぞれ卒後1・3年目および卒後3・5年目の結果について比較した。

調本任由	卒業年度					
調査年度 	2021	2019	2017	2015		
2020	_	卒後1年	卒後3年	卒後5年		
2022	卒後1年	卒後3年	卒後5年			

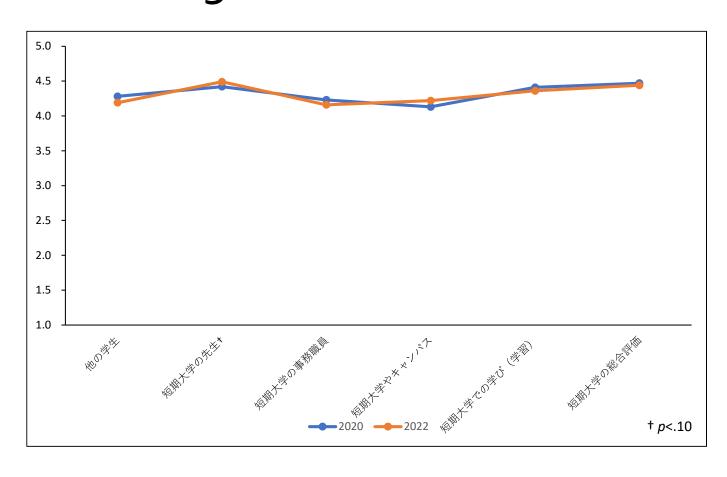
 なお、各調査の卒業年度別回答者数は、2020年度調査はそれぞれ1169名 (2019年度卒業生)・462名(2017年度卒業生)であった。 また、2022年度調査はそれぞれ367名(2019年度卒業生)・217名(2017年度卒業生)であった。

#### 結果一知識・能力の役立ち一 (2019年度卒業生【卒後1・3年目】)



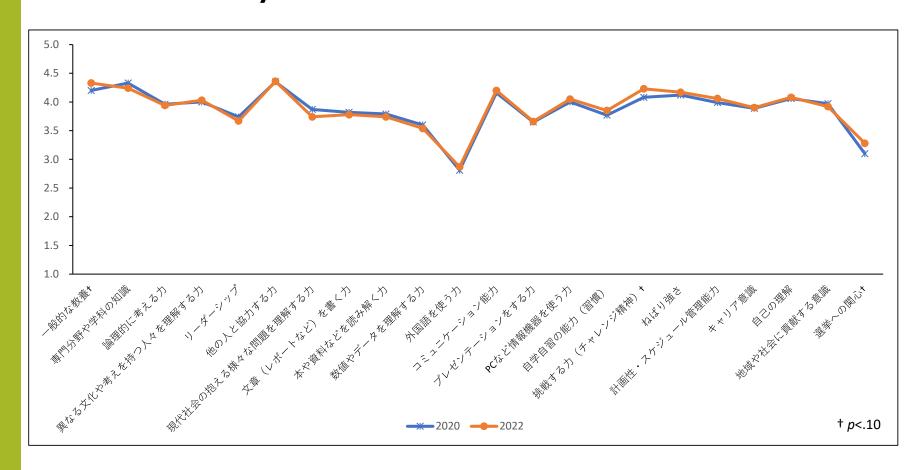
- 全体として知識・能力 の役立ちに対する評価 は高く、卒業からの年 数が経過していたとし ても大きな変化がみられない。
- 「現代社会の抱える様々な問題を理解する力」と「外国語を使う力」は有意に異なる結果に。

#### 結果一短期大学の総合評価一 (2019年度卒業生【卒後1・3年目】)



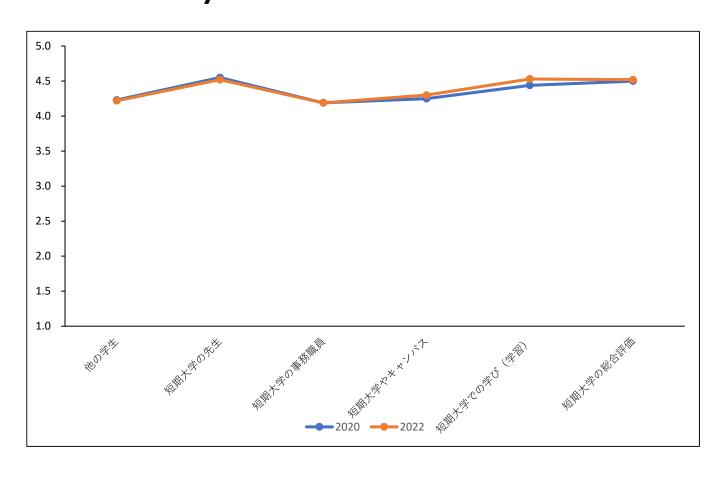
- ・全体としては、卒後の年数 にかかわらず、総合評価は 高い傾向にある。
- 「短期大学の先生」については、卒後1年目の方が3年目に比べて有意に高い傾向がみられた。

#### 結果一知識・能力の役立ち一 (2017年度卒業生【卒後3・5年目】)



- 全体傾向としては卒後1・3年目と同様に、大きな変化はみられない。
- 「一般的な教養」と 「挑戦する力」「選挙 への関心」は卒後5年 目の方が高い傾向がみ られた。

#### 結果一短期大学の総合評価一 (2017年度卒業生【卒後3・5年目】)



- 全体傾向としては卒後13年目と同様に、大きな変化はみられない。
- 特に卒後3・5年目については、有意な差や有意な傾向がみられた項目はなかった。

#### 考察

- 卒業からの経過年数によって短期大学教育に対する評価は大きく変化しないことが明らかとなった。
  - ⇒しかし、項目を詳細にみると有意差がみられる設問も複数みられた。
- 有意差(もしくは有意傾向)がみられた項目(知識能力の役立ち)
  - 「現代社会の抱える様々な問題を理解する力」(3年目<1年目)</li>
  - 「外国語を使う力」(1年目<3年目)</li>
  - ・「一般的な教養」(3年目く5年目)
  - 「挑戦する力」(3年目<5年目)</li>
  - 「選挙への関心」(3年目<5年目)</li>
  - ⇒むしろ、卒業からの経過年数が長い方が評価が高まる可能性。

### 考察

- その要因として、 実際に仕事をする中で「一般的な教養」や「挑戦する力」、「外国語を使 う力」を求められるシチュエーションが多い? ⇒そこで短期大学教育を振り返ることで評価が高まった?
- 一般に、短期大学教育の効果の継続年数は短いと考えられているが、想定よりは短期大学教育の効用は長い期間持続する可能性もある?

上記2点は、今年度中に卒業生へのインタビュー調査を通じて、質的なアプローチから検討を進めていく予定である。

### 考察

- 問題点として、調査回収率が10%後半から20%前半程度であり、回答者の偏りが大きい可能性が否定できない。
  - ⇒調査に回答する=短期大学教育肯定派の可能性。
- 調査の回収率を高める仕組みづくりを参加短期大学と協働で進める必要。

## ありがとうございました

質問やご意見等がございましたら、 miyazato\_s@obirin.ac.jp(宮里) sakai\_o@obirin.ac.jp(堺) までご連絡ください。

※本研究は、JSPS科研費19Ko2866の助成を受けたものです。

